

P-125^{*}

非小細胞肺癌および転移性肺癌に対する
Biochemical Modulation 法による化学療法の
検討

京都大学胸部疾患研究所胸部外科

○小阪真二、竹中一正、磯和理貴、岡田圭司、黒谷栄
昭、横見瀬裕保、乾健二、池修、八木一之、水野浩、
青木稔、和田洋巳、人見滋樹

【目的】近年、消化器癌、頭頸部癌に対して、CDDP と
5-FUを使用した Biochemical Modulation 法による化
学療法が施行され、高い有効率が報告されてきている。
そこで我々は、非小細胞肺癌および転移性肺癌症例に
対して、Biochemical Modulation法による化学療法を
施行し、その効果と副作用について検討した。

【対象】CDDP 7mg/m², 5-FU 150mg/m² Day1-5 div を
原則とし、それを1クールとした。当科で1992年6月よ
り現在までに同法による化学療法が施行された症例は
29例。非小細胞肺癌24例、転移性肺癌5例。非小細胞肺
癌の術後補助療法として施行したものが7例、化学療
法単独が10例、化学療法と同時に放射線療法を施行し
たものが12例であった。

【結果】効果は、非小細胞肺癌において化学療法単独
群でP R 3例、奏効率33%、放射線併用群でP R 9例、
奏効率67%、転移性肺癌症例でP R 2例、奏効率50%で
あった。副作用は、嘔気、嘔吐、食思不振、下痢が主
であり、grade3が1例のみで他はgrade2以下、血液毒性
も軽度でgrade4が1例のみで他はgrade2以下であった。
化学療法によるとと思われる死亡は1例であった。

P-127 肺癌に対する動注リザーバシステムの確立 気管支動脈内カテーテル留置法

医療法人増田外科医院¹、社保中央病院放射線科²
防衛医科大学校³

○増田秀雄¹、牧田幸三²、尾形利郎³

【目的】抗癌剤の薬理動態を考慮した場合、現在の
キードラッグであるシスプラチンは動注に適した薬剤
であり、我々はその有効性をおもに切除組織の薬剤濃
度の測定を中心として報告してきた。今回は肺癌患者
に対して、リザーバシステムを完成し反復動注を施
行し良好な経過を得ているので症例を報告してその意
義について検討する。

【方法】症例は81歳、女性、右上葉腺癌。左下葉肋
膜炎の既往があり、CEA が33.7と高値を示した。シス
プラチンBAI を平成5年1月、2月に2回行い有効性が認
められたので、3月5日に右大腿ソケイ部にリザーバ
を埋め込み気管支動脈にカテーテルを留置、経皮的に
反復動注を行い抗癌剤を投与した。

【結果】リザーバ留置によりPR効果が得られ、CEA
は2.9(33.7:治療前)まで低下し、治療開始後5ヶ月経過
良好であり、リザーバは4月30日に抜去した。

【考察】肺癌に対する気管支動脈カテーテル留置リ
ザーバ造設が可能であることを実証した。これは進
行肺癌の治療指針を建てるうえで臨床応用可能で有用
な治療法と成りうるものと考えられ、今後実際の投与
法(投与量、投与間隔)についての検討を行いたい。

P-126 術中温熱化学療法の試み

浜松医科大学第一外科

○影山善彦、鈴木一也、野木村宏、小林 亮、
豊田 太、原田幸雄

【目的】胸部悪性腫瘍の手術症例で、開胸後偶然胸膜
播種や悪性胸水貯留を認める場合がある。このような
症例に対し、温熱化学療法を行うために、簡単な灌流
回路を試作し使用しているのを報告する。

【対象と方法】開胸後発見された胸膜播種・悪性胸水
貯留を伴った肺癌3例、悪性リンパ腫1例に対し、熱
交換器(Dideco社製、D720HELIOS)の流入、流出部に
それぞれ温度センサーを取付けた回路に、CDDP 50
~100mg/body、ADR 30~50mg/bodyを加えた約3,000
mlの温水をローラーポンプにて43℃で30分間維持する
ように胸腔内を灌流させた。

【結果】温熱灌流中に循環呼吸状態に異常を認めな
かった。術後多量の胸水貯留や出血等による呼吸不全や
胸腔ドレーン抜去後に著しい胸水貯留を認めることも
なかった。効果判定については術後化学療法が追加施
行されており、客観的に評価するのは今のところ困難
と思われる。

【考案】開胸後偶然発見された胸膜播種や悪性胸水を
伴った症例に対する治療方針決定にしばしば難渋する。
われわれは、集学的治療の一貫として、術中簡便に施
行できる温熱化学療法用の灌流回路を準備している。
治療効果についてはさらなる症例の蓄積を待ちたい。

P-128^{*} 肺癌患者の化学療法後における末梢血幹細胞 採取時期の検討

奈良県立医科大学第二内科¹、同 輸血部²

○西川 潔¹、三笠桂一¹、鴻池義純¹、山中貴世¹、
森井武志¹、成田巨啓¹、河本順雄²、下山丈人²、
藤村吉博²

【目的】我々はこれまで、造血器悪性腫瘍を中心に末
梢血幹細胞移植(PBSCT)を行ってきたが、今回肺癌
患者に対する超大量化学療法としてのPBSCTを目的
として、末梢血幹細胞採取時期の検討を行った。

【対象と方法】対象は、原発性肺癌5例(小細胞癌
3例、腺癌2例)。化学療法は、小細胞癌ではCDDP
(100mg/m² day 1) + VP-16 (100mg/m² day 1, 3, 5)、
非小細胞癌ではCDDP (100mg/m² day 1) + VDS (3mg/
m² day 2, 8) + MMC (8mg/m² day 1)。いずれも化学
療法開始後 day 10 より G-CSF 2μg/kg を使用した。
解析方法は、1) 末梢血 CD34%を抗 CD34 モノクロ
ナル抗体と flow cytometry を用いて測定。2) 末梢
血中のCFU-GM 数をメチルセルロース法にて測定。

【結果】末梢血中のCD34%およびCFU-GM 数のピー
クは末梢血白血球数が10,000/μl前後に回復する時
期であった。一症例(小細胞癌、64才、男性)で化学
療法開始後 day 22 にCD34%が0.48%、CFU-GM 数
が316/mlと明らかな増加が見られたが、他の症例で
は増加率はわずかであり、幹細胞採取には不十分と考
えられた。

【考案】従来より末梢血幹細胞を効果的に採取でき
ると言われている Ara-C 等を加えた化学療法の検討が
今後必要と考える。